

# マーガレット・フラー

—— ミネルヴァとミューズ ——

水 本 有 紀

## 1

1848年ニューヨーク州、セネカ・フォールズである重要な会議が開かれた。一般にセネカ・フォールズ会議と呼ばれることになるこの会議では、アメリカ合衆国市民として当然与えられなければならないはずの選挙権をはじめとする様々な権利を女性が獲得すべきだとの主張が繰り広げられ、この会議から、アメリカにおける女性解放運動の第一歩が踏み出された。自身はイタリアに滞在していたため会議には出席していないが、この運動に最も大きな影響を与えた人物の一人がサラ・マーガレット・フラー（1810-50）である。フラーはアメリカにおけるフェミニズムの先駆者として名高い女性だが、当時のフェミニズム運動の展開に対するフラーの特筆すべき貢献は、超絶主義の思想を視座に入れながら独自の女性論を構築した点である。

フラーは、男女ともに「自己信頼」を発展させることこそが社会の構造を改善する原動力に他ならないと考え、次のように力説している。

I have urged upon the sex self-subsistence in its two forms of self-reliance and self-impulse, because I believe them to be the needed means of the present juncture. (96)<sup>1</sup>

自己信頼は、エマソンが編み出した超絶主義の根幹をなす観念である。エマソンは自己、あるいは魂の中に神が存在するゆえに、自己を信頼することは、神に帰依することであると考えた。神の植林地である森という自然の中に入ることによって、自己が「一個の透明な眼球」となり、あらゆるものを見ることができるようになり、その結果、最終的には普遍者である神と合一できると信じたエマソンはその神との合一を夢見た。エマソンは楽天主義と自己

信頼を表明し、すべての人間の無限の可能性を信じたが、それは地位や身分、性のいかに問わない、純粹に民主主義的な思想であった。自己を全面的に信じ、自己に対する束縛はいっさい拒絶するという自己信頼を中心にしたエマソンの考え方に感銘を受けたフラーは、そのエマソンの自己信頼の思想を自らの思想の中核に据えた。

本稿では、知性的にも行動的にも並外れた能力を持っていながら、あるいは持っていたがゆえに、19世紀前半のヴィクトリア朝的なアメリカの社会において常軌を逸した女性とさえ見なされたフラーの主著でもあり、当時の女性の心を捉えた作品である *Woman in the Nineteenth Century* を取り上げる。フラーが理想とした女性像がいかなるものであったのか、そしてフラーが女性に訴えなかったのは何だったのか、以下、自己信頼の観念とミネルヴァとミューズに象徴される二つの要素を中心に議論を進める。

## 2

フラーの主著である *Woman in the Nineteenth Century* はフラーの作品の中で最もよく知られており、フラーの活動の集大成ともいうべき著作である。エリザベス・ピーポディ経営の書店でボストンの女性たちを相手に開かれた談話を編集・出版した *Woman in the Nineteenth Century* は、女性の精神の自由、女性が一個人として成長していくことの重要性を説いた作品であり、その後のアメリカにおけるフェミニズム運動の展開に大きな影響を与えた。

アメリカにおける最初のフェミニズム宣言である *Woman in the Nineteenth Century* は、全篇を通して、女性差別の現状、女性の本来あるべき姿、そしてその実現のための忠告がフラーの熱意のこもった口調で語られている。フラーによれば、当時の社会の状態では、特に女性は人間として当然の成長をとげる機会が与えられていない。これは女性だけでなく男性にとっても不幸の種である。女性は対等に扱われさえすれば、知、情、意いずれにおいても男性に劣らぬ力を示しうるのであり、いまこそ長年の偏見を打破し、女性の地位向上をはかるべきだ、とフラーは力説する。

しかしながら、フラーにとって女性解放とは何らかの現実的な利益をめざす

ものではなく、女性の本性が成長し、魂が自由になるための必然的要求なのである。そして虚飾を捨て精神性に生きよ、という訴えに顕著に表れているように、フラーは女性解放のためにはまず女性自身の意識改革から始めなければならないと主張する。作中にみられるおびただしい数の例証もこの目的に沿ったものである。古今の実在あるいは架空の人物を例に挙げながら繰り返される優れた女性についての記述は、構成を散漫にする嫌いはあるものの、読み進むうちに確固たる理想の女性像へと実を結ぶ。自信と発奮の気持ちを読者に与えたことは間違いない。

フラーは、しばしばイギリスの女権運動家メアリー・ウルストンクラフト(1759-1822)と比較検討されてきた。実際、フラーはウルストンクラフトの著作を読んでおり、*A Vindication of the Rights of Woman* (1792) は特にフラーの言動の指針となった作品の一つである。ウルストンクラフトも女性の市民権や政治的権利を要求し、男女平等を訴えていた。しかしながら、*In Search of Margaret Fuller: A Biography* の著者アビー・スレイターも指摘している通り、二人の作品には重要な違いがある。

And that was fifty years earlier, in England, when Mary Wollstonecraft's *Vindication of the Rights of Woman* had appeared. But although both books were pleas for women's rights, there were important differences between them. The British book was written under the influence of the ideas that had sparked the American and French revolutions—the ideas of innate human rights and of political democracy. Margaret was concerned with social roles and personal relationships—with woman's right to choose their own ways of life and their own occupations, and with their right to full social equality with men.

(*In Search of Margaret Fuller*, 89-90)

ウルストンクラフトがアメリカ独立戦争、フランス革命という政治的混乱の影響下におかれた人間の権利獲得を訴えたのに対し、フラーはより精神的で幅広い意味での社会における女性の人間としての権利の重要性を主張している。つまり、女性が人間として男性と対等な立場に立って生きるべき権利を獲得すべきだとフラーは説いているのである。

ところで先に述べたように、フラーは当時のアメリカ社会から奇異の目で見られていた。たとえば、女性観については、*Woman in the Nineteenth Century*の中でフラーは様々な時代の、様々な状況における女性を観察しながら、聖書の教えが女性の地位を引き下げたという、当時としては大胆とも言える意見を表明し、顰蹙を買った。因みに、たとえば、アダムについては次のように述べている。

The rude man, just disengaged from the sod, the Adam, accuses Woman to his God, and records her disgrace to their posterity. He is not ashamed to write that he could be drawn from heaven by one beneath him, —one made, he says, from but a small part of himself. (26)

そして愛こそが女性の全てであり、知性など無用の長物であるという当時の通念を非難し、女性の知性や能力の向上を妨げる元凶として当時の社会、教育制度に疑問の目を向けた。

当時、フラーのように伝統的な女性像に真っ向から挑戦する女性社会から厳しく糾弾されたが、そのような当時の風潮を反映したフラー批評の代表例として、オレステス・ブラウンソンの批評を挙げることができる。ある意味で19世紀のフラー批評の流れはブラウンソンのフラー批判に沿っているといっても過言ではない。宗教、政治、奴隷制、そしてアメリカ文学に関する批評を多く残したブラウンソンはフラーの著作を次のように酷評している。

The title gives no clue to the character of the work; for it is no part of its design to sketch, as one would suppose, the condition of woman in the nineteenth century [...]. All is profoundly obscure, and thrown together in “glorious confusion [...]”. As we read along in the book, we keep constantly asking, What is the lady driving at? What does she want? But no answer comes. She does not know, herself, what she wants. (Brownson)

「全体的に曖昧で、何を言いたいのかさえ分からない」というわけである。確かに *Woman in the Nineteenth Century* は、実例を羅列しただけで一貫性がないように思われ、フラーの意図が把握しにくいと指摘されることがしばしばある。しかし、フラーの表現方法にはいかにも超絶主義者らしいフラーの特徴

がある。その点に関して、例えば、*A Life of Margaret Fuller: Minerva and the Muse*の著者メーレンは次のように述べている。

She [Fuller] wrote in a rush of inspiration, just as she spoke. Speaking and prophesying from direct experience, she felt under no obligation to be strictly coherent. For her, in this case, the essential elements of communication were the steadiness and intensity of the inspiration, spontaneity and sincerity, not the order of thought. (*A Life of Margaret Fuller*, 193)

要するに、読者が読みにくいと感じる要因は、メーレンが言うように“inspiration”のままに感じたことを表現することを良しとするフラー自身の文章法にあったといえよう。

しかしながら、この要因が負の側面のみをもっていただけではないことも指摘しておかなければなるまい。女性を対象として開かれた「フラー・カンバセーション」で、人生とは何か、人は何のために生きるのか、といった議題についてフラーが述べた意見は、多くの女性に感銘を与えた。原稿も用意せず、インスピレーションによって話すフラーの姿は、ある意味預言者的な存在として女性たちの心を捉えたのである。直感で感じたままを口にし、文字として記すフラーの文章は読みにくさゆえに読者を悩ませる一方で読者の心を捉えて離さなかったのであるが、これは、フラーの友人でもあり、フラーが師と仰いだエマソンとも相通じる傾向であった。

A foolish consistency is the hobgoblin of little minds, adored by little statesmen and philosophers and divines. With consistency a great soul has simply nothing to do [. . .]. Speak what you think now in hard words and to-morrow speak what to-morrow thinks in hard words again, though it contradict every thing you said to-day. (Emerson, 33)

これは首尾一貫性を揶揄したエマソンの有名な文章であるが、さらにエマソンは“To be great is to be misunderstood.” (Emerson, 34)とも述べている。直感を重視するあまりに、ややもすれば首尾一貫性を軽視し、時には自己矛盾をも正当化しようとする、一見開き直りとも見えるエマソンの姿勢は、また超絶主義の特徴でもあったが、その姿勢をフラーも併せ持っていたのである。

ところでブラウンソンは、キリスト教によって女性が格下げされたとするフラーの意見を真っ向から否定している。

Woman is no more deprived of her rights than man is of his, and no more enslaved. Woman as to her moral and spiritual nature has always been emancipated by Christianity, and placed as a human being on the same platform with man. She is treated, and always has been treated, by Christianity as having an immortal soul, and as personally accountable to her Maker. In this respect man has no claims and is allowed no preeminence over her; and what more can she ask?  
(Brownson)

聖職者という職業柄、当然といえば当然の口吻であるが、ブラウンソンにすれば「女性は男性より諸権利を奪われているわけでもなければ、ましてや奴隷と化しているわけでもない。女性はキリスト教によって解放され、男性と同じ場に置かれている。キリスト教によって不滅の魂を持つ存在として扱われ、神の監督下にあるのだ」というのである。

さてブラウンソンが批判的にしているフラーの見解を検討しよう。

The man habitually most narrow towards woman will be flushed, as by the worst assault on Christianity, if you say it has made no improvement in her condition. Indeed, those most opposed to new acts in her favor, are jealous of the reputation of those which have been done. (22)  
The empresses who embraced the cross converted sons and husbands. Whole calendars of female saints, heroic dames of chivalry, binding the emblem of faith on the heart of the best-beloved, and wasting the bloom of youth in separation and loneliness, for the sake of duties they thought it religion to assume, with innumerable forms of poesy, trace their lineage to this one. Nor, however imperfect maybe the action, in our day, of the faith thus expressed, and though we can scarcely think it nearer this ideal than that of India or Greece was near their ideal, is it in vain that the truth has been recognized, that woman is not only a part of man, bone of his bone, and flesh of his flesh, born that men

might not be lonely--but that women are in themselves possessors of and possessed by immortal souls. This truth undoubtedly received a greater outward stability from the belief of the church that the earthly parent of the Saviour of souls was a woman. (27)

当時のアメリカではキリスト教中心の父権的文化が、女性による新たな活動を抑制していた。そのようなキリスト教に内在する女性蔑視に対し、フラーは女性も男性の一部ではない、キリスト教の主張する女性の劣性を正当化するものは何もない、と主張している。さらにフラーは、男女の別なく人それぞれに内在している“immortal soul”の存在を、多くの人々が、特に男性が認識していないことが、女性が強いられる苦痛の原因だと強調している。現実社会では、性別により社会的役割の区別が存在しているが、人間の本質においては、つまり“immortal soul”の次元においては、男女の区別はない、とフラーは主張するのである。

フラーとブラウンソンの意見の相違は次のブラウンソンの文章からも読み取ることができる。

But God, and not man, has assigned her the appropriate sphere; and, moreover, we must be ungallant enough to question Miss Fuller's leading doctrine of the social and political equality of the sexes. She says man is not the head of woman. We, on the authority of the Holy Ghost, say he is. The dominion was not given to woman, nor to man and woman conjointly, but to the man. Therefore the inspired apostle, while he commands husbands to love and cherish their wives, commands wives to love and obey their husbands; and even setting aside all considerations of divine inspiration St. Paul's authority is, to say the least, equal to that of Miss Fuller. (Brownson, 下線は引用者)

下線部のように、フラーが男性が女性の長ではないと言っているのに対し、ブラウンソンは男性が女性の長であると断言している。主権は男性に与えられているのだから、パウロは、夫は妻を愛し慈しみなさいと言う一方で、妻は夫を愛し従いなさいと言っているのだ、というのがブラウンソンの主張である。そして、ここで使われている“obey”という言葉が、フラーをキリスト教批判へと

駆り立てたのである。この場合の女性が男性に“obey”することはすなわち自分個人の意志に従うのではなく、男性の意志に服従することに他ならないからである。これはフラーの望む男女の完全な union とは程遠い姿であった。フラーは決してキリスト教そのものを否定したわけではないが、キリスト教に根づいた当時の誤った「固定観念」が、女性を男性の奴隷として位置づけており、その呪縛から女性を解放しなければならないというのがフラーの存念であった。

## 3

フラーは、知識ある男性学者でさえも及ばないほどの博識の持ち主で、その男性顔負けの威勢のよい話し方で知られていた。また、現代のフェミニズム研究者マージョリー・ガーバーは、特に父親ティモシー・フラーによる男性向けの教育を受けることで身に付いたフラーの文体、話し方の特徴を、服装倒錯的と称して、これはフラーが当時の社会から圧力を受けた結果だと指摘している。ガーバーによれば、フラーの時代には女性は自らの意思を表明することを認められておらず、当然のこととして自らの意思を表明する術を持ち合わせていなかった。それゆえ、女性が自らの意思を表明するためには、たとえばジョージ・エリオットやジョルジュ・サンドに代表されるように、女性は女性的ではなく、男性的に振舞わざるをえなかったのである。(Rix)

こうしたフラーと知人の間柄にもあったエドガー・アラン・ポーは、“[...] humanity is divided into three classes: men, women, and Margaret Fuller [...]” (*Margaret Fuller: American Romantic*, 192) とフラーを揶揄している。また、フラーの知人の男性たちもまた、フラーを二つの対立的な要素“masculine”と“feminine”の union として見ていた—— “[...] they saw her as a hybrid, a union [...] of two usually exclusive tendencies as ‘masculine’ or ‘feminine.’” (*The Woman and the Myth*, 19) しかし、おもしろいことに、あるいは見様によれば皮肉にも、この対立する二つの要素が、フラーの女性論の核を成しているのである。

フラーは、この対立する二つの要素を説明するに当たり、二人の女神、ミネルヴァとミューズを引き合いに出している—— “There are two aspects of



woman's nature, represented by the ancients as Muse and Minerva.” (61) そして、メーレンも指摘しているように、フラーは、これら二つの要素を調和させようと試みる。

Fuller liked to experiment with ways of harmonizing and balancing opposing elements: humanism and idealism, culture and nature, intuition and tradition, rich and poor, male and female, Minerva and the Muse, past and future. (*Minerva and the Muse*, 4-5)

また、“Man partakes of the feminine in the Apollo, woman of the masculine as Minerva.” (62) と述べていることからわかるように、フラーは、男性にも女性性が存在し、同様に女性にも男性性が存在すると考えている。これに関連してリチャードソンも、“She [Fuller] expressed mythologically her conviction that masculine and feminine qualities exist side by side in every individual [. . .].” (*Emerson: The Mind on Fire*, 239) と、フラーが“masculine”と“feminine”という二つの特質が男女別々にではなくすべての人間に同様に存在するという考えをギリシャ神話を用いて説明している点を指摘している。フラーはこの二人の女神を、“masculine”的要素と“feminine”的要素を持つ二つの典型とし、知性の女神であるミネルヴァが“masculine”であり、芸術の神であるミューズが“feminine”であると見なした。

ここで、フラーがミネルヴァとミューズを引き合いに出した背景を探ってみたい。まず、女神、女の神、つまり女性という性を持つ神を例に挙げている点に着目しよう。まずミネルヴァから考えてみたい。

ミネルヴァは、女神の中でも特に奇異な女神であるといえる。そもそも父親ゼウスから生まれたというところからしてきわめて特異な性質を備えている。しかも、知恵の女神である妻メティスを呑み込んでその知恵を自らのものとした父ゼウスの知恵の象徴とされる額から「全身に鎧を着たままで」生まれているのである（『ギリシア・ローマ神話』, 152）。この武装した誕生の姿には男性的なミネルヴァの特徴が暗示されている。ミネルヴァは男神ではないが、ミネルヴァの体現する特徴は、きわめて男性的であるといえる。母親ではなく父親から生まれたということも、女性としての束縛から自由で、男性的価値観を具現できる象徴と考えられる。これが、まさにフラーの言う“masculine”的要素

素を体現した女性の代表である。また、ミネルヴァは医術をつかさどる女神でもあり、当時のアメリカ社会において女性が医師になることを許されていなかった背景を考えると、ミネルヴァがフラーにとって理想的な女性像となった理由が首肯できる。

一方、ミューズは、一般には芸術の女神として知られているが、詳しくは、「靈感」の源としての九人の女神の一人とされている。「靈感」(inspiration)は字義的には、「女神の精気」(I-dea)を吸い込むという意味がある(『神話・伝承事典——失われた女神たちの復権——』, 562)。また、soulの語源であるドイツ語のSeeleは、女性名詞であり、ゲーテは、女性的な究極の實在という意味として用いていた。soulの意味の古典語はたいてい女性名詞であり、たとえば、プシュケ、アニマなどを挙げることができる。神の靈魂、たとえばメティス、ユノは女神であった。古代人の間では、男はすべてその地上の母を介して、母神に由来する女性霊を持っていると信じられていた。フラーは、ミューズを女性的特質を備えた霊的な存在と見なして、ミネルヴァとは正反対の存在として捉えている。また、フラーが *Woman in the Nineteenth Century* の中で触れている“the magnetic element”は、ミューズに由来している。

The electrical, the magnetic element in Woman has not been fairly brought out at any period. Everything might be expected from it; she has far more of it than Man. This is commonly expressed by saying that her intuitions are more rapid and more correct. (55)

The especial genius of Woman I believe to be electrical in movement, intuitive in function, spiritual in tendency. (61)

What I mean by the Muse is the unimpeded clearness of the intuitive powers which a perfectly truthful adherence to every admonition of the higher instincts would bring to a finely organized human being. (62)

ミューズは水の精霊を起源とされていた。九人のミューズから溢れ出る豊富な力が“The electrical, the magnetic element”を発生させ、女性の“intuition”をより早く働かせることができるとフラーは述べている。フラーは“The electrical, the magnetic element”を男性よりも女性に多く見られる女性的要素として捉えているのである。

フラーはミネルヴァ的、つまり“masculine”的素質である知的訓練、批判的知性、自己覚醒を発展させることが、女性が必要とするきわめて重要な要素であると強調している。そして、男性的要素と、女性がすでに備えている感情的で直感的な、女性的（ミューズの）要素とをバランスよく兼ね備えることが女性の理想的なあり方であると見なしている。つまりフラーはミネルヴァとミューズの両要素をバランスよく備えることこそが、女性が自分たちの地位を脅かす問題に対抗し、社会における男性と同等の地位を得るために欠かせないと考えているのである。さらにフラーは、ミネルヴァ的要素“masculine”とミューズの要素“feminine”の比率は男女によってではなく、個人によって異なると考えている。この考えは、“There is no wholly masculine man, no purely feminine woman. (62)”という、完全に男性性のみから成る男性も、女性性のみから成る女性も存在しないという確信に満ちた言葉の背景ともなっている。

一般に“masculine”と“feminine”は二項対立的に捉えられるが、この場合、いずれかが上位、いずれかが下位という構図に陥ってしまう。一方で自己信頼を強調するフラーは、神が内在するselfを媒介とした、masculine—self—feminineという一元的な構造を理想としている。フラーは、当時のアメリカ社会ではこのような考えが浸透していないから、女性は下位の存在として、男性の付属品的な扱われ方をされているのだとし、その原因として、女性の側における自己信頼の欠如を挙げている。フラーにしてみれば、自己信頼を遂げていない女性は真の女性ではなく大きくなった子供にすぎない——“Now there is no woman, only an overgrown child.” (96) “That her hand may be given with dignity, she must be able to stand alone.” (96) というフラーの叱咤激励とも取れる言葉からも分かるように、フラーは女性が社会において一個人として自立するためには、社会制度の改革だけでなく、女性自身の志の高さ、自主性が必要だと訴えているのである。フラーは、女性の過度とも言える献身的な態度が、男性から軽視されるばかりか、自らも自身を低く見る原因になっているとしている。

I have urged on woman independence of man, not that I do not think the sexes mutually needed by one another, but because in woman this fact has led to an excessive devotion, which has cooled love, degraded

marriage, and prevented either sex from being what it should be to itself or the other. (96)

自己軽視の姿勢が、男性に対する依存に加え、女性を従属と墮落に導くのだとフラーは言う。これに対抗するためには、女性が自らの知性を発達させ、責任ある大人に成長しなくてはならない。

また、当時の社会においては、とりわけミネルヴァに代表される“masculine”の資質を開花させる必要がある、とフラーは次のように述べている。

It is, therefore, only in the present crisis that the preference is given to Minerva. The power of continence must establish the legitimacy of freedom, the power of self-poise the perfection of motion. (63)

実際フラー自身も、自らを“masculine”と“feminine”の両方を兼ね備えた“hybrid”と考えていた。しかし、両方の素質を兼ね備えるということは、つまり、自己信頼（self-reliance）のselfの中で融合された“masculine”と“feminine”の“hybrid”という、二元論的世界を超越した絶対的な要素を内包していることを意味する。*Woman in the Nineteenth Century*の最後は“The Sacred Marriage”という詩で締め括られているが、フラーは「錬金術」の比喻を用いながら、「聖なる結婚」に通ずる“masculine”と“feminine”の融合を説明している。錬金術とは、卑金属を金や銀などの貴金属に変化させようとする試みであるが、フラーはまさにこの異質のものを融合させて新たなものを作り出すというイメージを自身の女性論に組み入れた。Randall A. Clackが“For Fuller, the ideal state of the soul was imaged by a sacred marriage, an alchemical-like conjunction (reconciliation) of opposites.” (*The Marriage of Heaven and Earth*, 120) と指摘しているように、フラーが理想とする魂の状態は、“sacred marriage”，つまり“masculine”と“feminine”という異質なものの同士が錬金術的に融合する状態であった。<sup>3</sup> フラーが理想とした「聖なる結婚」には二つの側面がある。一つは、人間、特に女性のselfにおける“masculine”と“feminine”の融合であり、もう一つは男女の調和の取れた関係を指している。女性がselfにおいて“masculine”と“feminine”の融合を遂げた時、現実世界における男女の融合としての「聖なる結婚」も実現するとフラーは考えていた。

この聖なる結婚につながる自己信頼こそが、人間を男女の枠を超えた存在としてみなす際の必要不可欠な要素であり、フラーの女性論展開における最重要テーマであった。自己信頼を達成するためには、自己の主観性を重視し、限りなく追求しなければならない。自己信頼には当然のこととして個人主義的な意味合いがつきまとうが、フラーの場合、自己は個を超えた普遍的かつ統合的要素であり、この普遍的・統合的自己の追求こそがフラーの超絶主義者たる所以である。

さらに、フラーによれば、“masculine”と“feminine”は、液体が固体へ、固体が液体へと変化するように、形態が異なっているだけで、根源は一つである。

Male and female represents the two sides of the great radical dualism. But, in fact, they are perpetually passing into one another. Fluid hardens to solid, solid rushes to fluid. There is no wholly masculine man, no purely feminine woman. (62)

二つの素質が互いに混入し合うことができる理由は、人間の素質、行動の中心が、神の宿る自己にあるからである。あらゆるものに超絶的な価値を見出そうとしたのが超絶主義であり、超絶主義の、とりわけ自己信頼の考えに傾倒したフラーは、男女にも超絶的な価値を見出そうとした。

超絶主義は、本来異なる領域に属すると考えられている精神と自然、超感覚的世界と感覚的世界、創造主と被創造物とが連続し、さらに宇宙の森羅万象が相互に「類似」(analogy)と「照応」(correspondence)の関係にあるという、二元論を克服しようとするエマソンの思想を基盤としている。異なる二つの領域を結びつけるためには、両者の中間に位置し、両者を媒介する働きを担う存在が必要となるが、それがエマソンのいう自己である。フラーは、相矛盾する“masculine”と“feminine”，ミネルヴァとミューズとを錬金術的に統合しようとする、フェミニズム史上類まれな思想を作り上げた思想家といえるであろう。

以上、*Woman in the Nineteenth Century*におけるフラーの女性論において、男性性を表すミネルヴァと女性性を表すミューズの要素が一元的に融合されていく過程を見てきた。

フラーは、特にキリスト教における男性優位の考えを批判し、男女はともに一個の人間として差はないという主張を繰り広げた。また、女性が置かれている劣悪な環境については、単に社会に鉾先を向けるだけでなく、女性の意識のなさをも厳しく糾弾し、フラーは女性の自己育成、自己改造の必要性を、超絶主義の基本である自己信頼という概念を援用しながら説き続けたのである。

フラー自身、自分は自立した女性であると認識していた。その理由は、自分は男性的なミネルヴァ的要素と女性的なミューズの要素をバランスよく備えているからだという。異なる二つの要素が相互に交流することで、単なる二元論ではない、自己 (self) を媒介とした一元論的構造が作り出されるのだとフラーは考えた。つまり、フラーが意味するところは、男女とも神の宿る自己を認識すれば、すべての差別は自ずと解消されるはずであるということである。自己への信頼、認識こそ、フラーが目指す社会の根本的改革の重大要因であった。そして、“Then Apollo will sing to his lyre what Vulcan forges on the anvil, and the Muse weave anew the tapestries of Minerva.” (63) という一文が、フラーの理想とする社会への展望を凝縮している。

フラーにとって女性の解放とは、女性の人間としての本性が成長し、女性が自ら識別したことを正しいと信じ、魂が自由に妨げなく生きることである。

What woman needs is not as a woman to act or rule, but as a nature to grow, as an intellect to discern, as a soul to live freely and unimpeded, to unfold such powers as were given her when we left our common home. (16)

ここに、人間における精神的向上の無限の可能性と義務を説くフラーの超絶主義的人間観が見られる。

超絶主義者でもあり、奴隷制度廃止と女権拡張を謳ったフラーは19世紀のアメリカ社会において、あまりにも異質で急進的な人物であった。そのような時

代背景にあっては、フラーのような女性でさえ、自分が女性であるがゆえの葛藤を感じていたはずである。しかしながら、確かに言えることは、フラーは自分の信念がよりよい社会を作り上げると信じ、行動し続けてきたことである。フラーが掲げた女性論は、単に女性を擁護することを目的としているのではない。フラーの女性論は男女共存という、無限の精神的向上を遂げた人間によって築き上げられるはずの、地位、身分、性のいかに問わない、純粹に民主主義的な世界のヴィジョンであった。

### 注

- 1 Margaret Fuller, *Woman in the Nineteenth Century* (New York: Dover Publications, Inc., 1999). 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に記す。
- 2 これは、フラーが奴隷制廃止の講演を行ったグリムケ姉妹を擁護するために述べたものである。詳しくは、有賀 (95-98)、稲木 (22-23) を参照されたい。
- 3 Clack はさらに次のように述べている。

[...] the union of male and female, like that of Sol and Luna in alchemy, produces the "one [great] thought" that will "make the earth a part of heaven"—the alchemical union of heaven and earth. As Fuller notes later in the essay: "Male and female represent the two sides of the great radical dualism. But, in fact, they are perpetually passing into one another. Fluid hardens to solid, solid rushes to fluid. There is no wholly masculine man, no purely feminine woman." Again Fuller's words evoke the alchemical marriage (the reconciliation of opposites) of Sol and Luna and the alchemical hermaphrodite that is their offspring. Fuller recognized two different aspects of this male-female union. The first was the literal union between the sexes, but the second (and more important for Fuller) was the union of male and female elements within woman herself. As Fuller states: "The growth of man [woman] is two-fold, masculine and feminine" [...]. Only after woman integrated the male and female aspects of her own personality would she achieve a wholeness of self (the union) tantamount to discovering the philosophers' stone.

Before Fuller's alchemical union could be achieved, two important stages in this great work (Fuller's opus) had to occur: woman must be separated from the dross of patriarchy and she must discover the transmutative force of her own nature (her own seed of gold). Once these stages were accomplished, the "Sacred Marriage" that concludes *Woman* could be affected. (*The Marriage of Heaven and*

## 引証文献

- Brownson, Orestes. "Miss Fuller and Reformers." <http://www.orestesbrownson.com/print.php?id=63>.
- Clack, Randall A. *The Marriage of Heaven and Earth: Alchemical Regeneration in the Works of Taylor, Poe, Hawthorne, and Fuller*. Westport, Conn.: Greenwood Press, 2000.
- Emerson, Ralph Waldo. *Essays: First Series*. Ed. Joseph Slater et al. Cambridge: The Belknap Press of Harvard UP, 1979.
- Mehren, Joan Von. *Minerva and the Muse: A Life of Margaret Fuller*. Amherst: U of Massachusetts P, 1994.
- Miller, Perry, ed. *Margaret Fuller: American Romantic*. Ithaca, New York: Cornell UP, 1963.
- Richardson, Robert D. *Emerson: The Mind on Fire. California*: U of California P, 1995.
- Rix, Rebecca. "Margaret Fuller: Performing Civic Equality." <http://www.vcu.edu/engweb/transcendentalism/criticism/rixonfuller.html>.
- Slater, Abby. *In Search of Margaret Fuller: A Biography*. New York: Delacorte Press, 1978.
- 有賀夏紀.『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房, 1988.
- 稲木妙子, 上野和子, 須田理恵, 田邊治子, 寺澤恵美子, 永田美喜子, 吉原令子.『行動するフェミニズム——アメリカの女性作家と作品』新水社, 2003.
- 野上弥生子.『ギリシア・ローマ神話』. 岩波書店, 1983.